通常の学級と通級による指導の学びの連続性に関する研究③

－通級による指導を受けている児童生徒の学級担任を対象にしたアンケート調査結果から－

○北川貴章　笹森洋樹　海津亜希子　江田良市　村井敬太郎　若林上総　武富博文　清水潤　澤田真弓
（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）

KEY WORDS：通級による指導，学びの連続性，通常の学級担任

Ⅰ．目的

国立特別支援教育総合研究所では，インクルーシブ教育システム構築の視点から，通常の学級に軸を置き，通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当てた教育課程に関する総合的研究を行っている。特に通級による指導の内容を通常の学級での授業や生活に生かし，自立や社会参加をより一層促進することは，特別支援教育政策および学校教育現場において重要な課題となっている。この課題に対応するために，まず，通級による指導の教育課程上の位置付けや担当者間の連携の実態と課題を明らかにする必要があると考え，「通常の学級での通級による指導の活用に関する実態調査」を実施した。

本報告では，通級による指導を受けている児童生徒の学級担任を対象として実施した中から①通級による指導の指導内容の決定，②通級による指導の指導場面の参観の状況，③通級による指導の指導内容の活用状況等について報告する。

Ⅱ．方法

全国で通級指導教室を設置している 1,589 市区町村を小・中学校別に抽出し，人口規模に応じて５万人以下，５～10 万人，10～20 万人，20～50 万人（中核市），50 万人以上（指定都市）の５つに区分した。そして，区分した市区町村の中から，調査対象となる市区町村を全都道府県から抽出し，かつ，小・中学校の担任の回答の比較が可能な程度に同等な数となるように，小学校は 160 市区町村（13.93%），中学校は 158 市区町村（35.82%＜重複する地域あり＞）を抽出した。あわせて，設置数の少ない障害種（弱視，肢体不自由，病弱・身体虚弱）のある小学校 16 市区町村，中学校 9 市区町村を全て抽出した。

調査は，抽出した各教育委員会が所管する全ての小・中学校に所属する教員のうち，通級による指導を受けている児童生徒を担任する全教員を対象とした。各校への協力依頼は，各教育委員会を通じて行った。回答は，本研究所の Web サイトに開設した調査ページに開催されている調査シート（エクセルファイル）をダウンロードし，回答者がファイルをメール添付して本研究所に送信することで回収した。

Ⅲ．結果

288 の市区町村教育委員会が所管する全ての小・中学校に所属する教員のうち，通級による指導を受けている児童生徒を担任する全教員を対象にアンケート調査を実施したところ，通級による指導を受けている児童生徒の担任，4,898 名（小学校 3,339 名，中学校 1,559 名）より回答があった。

１．通級による指導の指導時間や内容の決定

「本人・保護者，通常の学級担任，通級による指導担当者で相談して決めている」という回答が 42.1%と最も多く，「本人・保護者と通級による指導担当者で相談して決めている」という回答が 29.3%，「通級による指導担当者が決めている」という回答が 15.5%であった。

２．通級による指導の指導場面の参観の状況

通常の指導場面（特別な行事は除く）の参観をしたことがあると回答したのは，23.0%であった。また，参観が必要であると回答したのは，84.5%であった。

３．通級による指導の指導内容の活用状況

通級による指導の指導内容を在籍学級の生活面や学習面に生かしているかを，５件法で回答を求めた。回答が多い順に，「生かされている」48.2%，「十分生かされている」24.8%，「少し生かされている」18.7%，「生かし方がよくわからない」5.5%，「生かされていない」1.8%であった。

４．通級による指導内容の決定に関するクロス集計

（１）個別の指導計画の作成者による比較

個別の指導計画を協力して作成している場合は，「本人・保護者，通常の学級担任，通級による指導担当者で相談して決めている」割合が 67.9%であった。担任等か通級担当者が作成している場合は，「本人・保護者，通常の学級担任，通級による指導担当者で相談して決めている」割合が 35.5%にとどまっていた。

（２）通級の形態による比較

指導内容の決定について，学級担任が関与していないと思われる項目に着目した。「本人・保護者と通級による指導担当者で相談して決めている」，「通級による指導担当者が決めている」と回答した数を合わせると，自校通級 29.2%，他校通級 65.6%，巡回指導 21.2%であった。

（３）参観の有無による比較

「（参観したことが）ある」と回答した群では，「本人・保護者，通常の学級担任，通級による指導担当者で相談して決めている」，いわゆる全ての関係者が指導内容の決定に関与している割合が５割を超えているのに対し，「（参観したことが）ない」と回答した群については，４割弱であった。一方，「（参観したことが）ない」と回答した群は，「本人・保護者と通級による指導担当者で相談して決めている」と回答した割合が 33.6%であり，「（参観したことが）ある」と回答した群よりも 15 ポイント高く，「通級による指導担当者が決めている」(17%)と合わせると５割を超えていた。

Ⅳ．考察

通級による指導の指導内容の活用状況は，参観している場合の方が生かしている割合も高く，実際に参観することで，生活面や学習面への生かし方のイメージがもちやすいことがうかがえる。また，個別の指導計画を学級担任も協力して作成している場合の方が，学習内容の決定においても本人・保護者も含めた三者の相談体制がよりとれていると思われる。

通級による指導の学習内容の決定において，「自校通級」，「巡回指導」と比べ，「他校通級」の場合は，学級担任の関与が少なかった。また，通級による指導の指導内容の活用についても，「自校通級」，「巡回指導」に比べて，「他校通級」では通常の学級の指導にどのように生かしてよいか分かっていないことが示唆される。今後，通級による指導をより効果的なものにし，通常の学級での生活や学習に生かしていくためにも，関係者間で指導に関する情報を共有し，学校全体で取り組む体制の構築が必要である。

(KITAGAWA Takaaki, SASAMORI Hiroki, KAIZU Akiko, KOUDA Ryouichi, MURAI Keitarou, WAKABAYASHI Kazusa, TAKEDOMI Hirofumi, SHIMIZU Jun, SAWADA Mayumi)